

工 事 發 達 史 傳

鐵 道 の 元 勳

井 上 勝

我國の鐵道工事發達に滿身の努力を捧げた井上勝氏の正面觀、五月號の續き(係)

これより先、王政維新の大事業達成せられ大權發動のもに、新政府の組織全く成るや安政條約改正の爲めの遣歐米特命全權大使岩倉具視、副使木戸孝允、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳等一行四十八人が、明治四年十一月横濱港を出發した。

この一行を乗せた船は、飛脚船アメリカ號で當時太平洋中の最大船で、四千五百五十噸千五百馬力であつた。

意氣揚々華盛頓府にのり込んだのが五年正月二十一日、グランド大統領に面會して、早速談判にかゝつたが、正當委任狀がないので談判中止、大久保、伊藤の兩副使が俄かに歸朝するこゝになつた。

歸朝後大議論の末、委任狀を携帶して、兩副使が再び渡米の途中、プロイセン公使ホンブランドと同船したが、公使は熱心を面に現はし

「日本の現状は條約面なきに就て、彼是云ふべき時代ではあるまい、四面海をめぐらす日本は、何を以て一國の獨立を保たうと居るか、日本は如何なる戰鬪力を持つて居るか、條約文で國家を安泰に維持するこゝは出來ない、先づ以つて工學を獎勵し、

實力を養成するこゝが急務である」と二人に説いた。

滯米中の大使等また米國政府より、工業發

達の基礎をつくるを急務とする所以を懇々説破され、何れも夢の覺めた心地にて、條約改正なきはそつちのけこなつた。



ロード・ケルビンと井上勝

かくて一行は英國に渡り、嘗て伊藤等を世話したマゼソンを介して、ロード・ケルビンと打合せ、ランキン及びゴルドンの立案に係る工學教育組織を、日本に施すこゝに決定して、歸朝の途につき、横濱に歸着したのは明治六年九月であつた。

× × × × ×

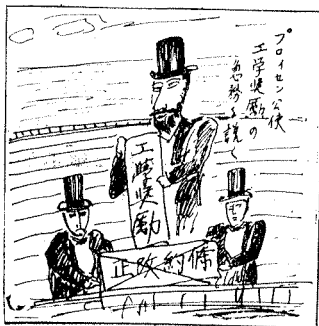
井上鐵道頭が突如辭任を申出で免官となつたのは、伊藤工部卿渡歐中のこゝで

「閣下大命を奉じて各國に使し、其亞官該省の事を理するに當りしより。日を逐ひ月を経るに従ひ、悲哉其亞官と共に不信を懷き頗る議の協はざるに至り、勉て事を俱にせんとするに堪へず、強て命を須ひんとするに忍びず、此際たこへ堪へ忍ぶも、到底勝が國家に奉ずるの志に背くあるの故に、不得已一旦職を辭す」

これ彼れが伊藤工部卿に訴へたる書面である七年一月再び鐵道頭に任せられた彼は請ふて鐵道寮を大阪に移し、京阪地方の鐵道建設に全力を盡くすこゝになつた。

二年を経て彼は書を伊藤工部卿に呈す

「今日京阪の業既に央に過ぎ、京越の測量も竣を告げ、尾線亦業を卒るも、一步他の測量にかゝるべきの命なく、一里他の建築に着手の命なし、内外官工これを使ふに業なく、是を用ふるに地なし、殆ど將に無事に苦しまんこす、爰に於て舉寮其務むる所の方向を失し、是を勝に問ふ勝また答ふ



るに窘む、故に僚佐の紛議を生ずる素より宜ならずや、既に可務の事を務め、興すべきの業を興し、而して今如此躊躇進む能はざらしむるものは、そもそも誰がごがぞや、凡我國地の膏腴と鑛山産物或は國民製造の諸品、絹布陶器漆器の類に至るも各國傳へて精巧を賞するに、之を措て顧みず、遊手徒食其窮乏に陥るもの、擧て數ふべからず、たまたま業を得たりこして、是に安んずるも、或は牛馬の任に横はりたごへば人力車の如き、數里の遠きにひきて、其得るごころ纔に一日の飢を充たすに足らず、此の如く土地開けず、人民卑劣を窮むるもの、國に運輸交通開けざる爲に非ずや、故に今この鐵道をして、琵琶湖を懐にするの業を全うし續々原野を通じ、山岳を穿ち終に全國を網羅し、大に國の辨利交通を成すに至らば、膏地以て開くべく、鑛山以て拓く可く、人民則ち業に就くべし、夫如是は國富さらんご欲するも富まざるを得ず、弱ならんご欲するも得べけんや勝今如是陳腐の説を閣下に言ふ、閣下は夙に卓見を以て此業を起すの人なり、鐵道の利害得失は、明知する所にして、所謂佛に向て法を説くの誹を免れずご雖も勝此職を辱うし、身をこの鐵道に委ね、曾て國家の爲にはかるに世を開化の域に進め、國勢をして一振せしむるものは、鐵道を措て何をか求めん、而して今日の萎靡をなすは、到底國家の爲に非ざるを信ず、故にこの陳腐の説を吐露す

閣下勝が

職に盡すの微衷を察せば、大に廟堂に議を起し、以て進業の令を發せん事を希望に堪へざる也



鐵骨鐵筋の堂々たるビルデングに收まり、寒中なほ七十度の燠房に腦禁を沸騰徒消し、用閑を多幸とする新人



！この上書を読んで感いかん？。

十年一月、官制改正の結果、工部少輔に任ぜられ、鐵道局長仰付けられた彼は、大阪停車場内に工技生養成所を設け、技師長モレル等をして、教育の任にあたらしめた。

再三上書して鐵道線路の延長を促した彼はさらに一書を三條太政大臣に呈して、鐵道事業の不振を懇へた。

京都大津間の鐵道建設に着手するや、彼は自ら現場に臨み工事を督勵し、備外國人の直接指揮を止め邦人に代らしめた。

明治の初年鐵道創業の頃、測量設計は勿論現場督役等何れも外國人を使用する外道なく、たゞ英語を解する邦人を技手ごして、我職工に通譯施工せしむる様な次第で外國技術員の數も百二十人に達して居つた、従つてその給料手當等多額に上り、あまつさへ意志疏通の不充分なため、知らず識らず冗費に陥るごが多かつた、如此状態では長途の建設に不得策であるご考へた彼は、此の擧に出でたのであつた。

彼は局長ご技師長ごを兼ね、さしも難工事の逢阪山トンネルや、四十分一勾配の線路を好結果を以て完成せしめた。

十五年八月には工部大輔に進み、依然鐵道局長の任にあつて、夫れから夫れご鐵道網を全國に張る意氣込みで進みつゝあつた。

(次號へ)